

論文審査並びに最終試験の要旨

◎課程博士

学位申請者氏名

岡崎 まさみ

論文博士

論文題目

A Study of Current Pronunciation Issues of Japanese English Learners

本研究は、英語を専攻する日本人大学生が直面する分節(音素)および超分節(音素)上の課題を明らかにし、発音の明瞭性に与える影響を検討したものである。主研究課題は、(1)日本人英語学習者にとって明瞭に発音するのが困難な音素は何か、(2)学習者が実際に発音困難である音素が明瞭性にどんな影響を与えるかを検討している。副研究課題は、(A)学習者が取り組むタスク(診断単語リストおよび短いパラグラフの読み上げ、自由発話)によって音素の発音に違いはあるか、(B)学習者は自分の発音の難点を自覚しているか、(C)強勢とイントネーションのどちらが明瞭性に影響するかを検討している。また、音声認識ソフトやモバイルアプリなどのデジタルツールの活用可能性にも着目し、自律的な発音学習を支援する方法を探っている。さらに、日本人英語学習者の発音指導に向けた効果的なアプローチを提案し、コミュニケーション能力向上に貢献することを目指している。本論文の構成は、第1章序論、第2章先行研究、第3章研究方法、第4章研究結果、第5章考察、第6章結論の6つの章、A4判で総頁約200ページからなる長編の論文である。

本研究では、包括的なデータ収集を行うため、参加者の英語学習背景や発音に対する意識を把握するためのアンケート調査と発話録音データ収集を行うという研究方法を採用している。アンケートには、合計49名の参加者(n=49)が回答し、そのうち14名が録音に参加することを志願しており、録音データ収集では、3つの条件(診断単語リストおよび短いパラグラフの読み上げ、自由発話)で録音を実施している。分節(音素)の分析では、特に日本人英語学習者によく見られる誤発音に関連する母音と子音に重点を置いている。母音は、/æ/、/ɔ:/、/əʊ/など、子音は/l/、/r/、/θ/、/ð/、/d/、/v/などの音素を含む、語頭、語中、語尾それぞれに着目しながら詳細に分析している。自由発話の分析では、まず文字起こしアプリケーションCLOVA Note(2022)を使用して文字起こしを行い、その後、本研究を行った研究者が録音データを聞き修正を加えている。超分節(音素)の分析では、日本人英語話者にとって難しいとされる語強勢と語レベルのイントネーション(ピッチパターン)に焦点を当てている。発音の明瞭性評価には、本研究を行った研究者が作成した4つの評価尺度、(1)完全に明瞭、(2)かなり明瞭、(3)比較的明瞭、(4)明瞭でない、を使用している。録音データは、2人の評価者(本研究の日本人研究者、オーストラリア人の准教授)が分析している。両評価者は分節(音素)的および超分節(音素)的特徴の双方を分析し、特に目立った超分節(音素)的特徴(語強勢と語レベルのイントネーション)については、Praat(Boersma & Weenink, 2024)を使用し、さらに分析を行っている。

アンケート調査と発話録音データの分析結果から、英語を専攻する日本人大学生における特定の発音困難な母音と子音が明らかになり、これは既存の研究とも概ね一致する結果である。母音に関しては、/æ/、/ɔ:/、/əʊ/の発音が特に困難であり、これらが異なる母音に置き換えられる傾向があることが示されている。例えば、/æ/([apple]の/a/)は、/e/や/ʌ/、/ɔ:/([saw]の/o:/)は、/ɑ:/に置き換えられ、/əʊ/は日本語の/o:/に近い発音がされることが多く、これらの置き換えが明瞭性を低下させる主な要因となっていることが指摘されている。一方、子音に関しては、/l/、/r/、/θ/、/ð/、/v/、/d/の6つの音素において一貫した問題が確認されている。特に/l/と/r/の混同が顕著で、「play」と「pray」の区別が困難であった。また、/θ/([thin])や/ð/([that])はそれぞれ/s/や/z/などに置き換えられる傾向があり、これが明瞭性をさらに低下させたとしている。/v/や/d/も語末で誤発音されるケースが多く、それぞれ/b/や/t/に近い音として発音されることがあったことが示されている。さらに、予想外の結果として、/ʃ/([ship])や/tʃ/([championship])といった摩擦音や破擦音についても、母語に似た音があるにもかかわらず、一部の学習者にとって課題となっていたことが報告されている。診断単語リストの分析結果については、子音の問題が顕著な学習者グループAとそうでないグループBが存在することが確認され、参加者の認識と実際の発音の困難さには不一致があることも明らかにしている。例えば、/θ/や/ð/が発音困難であることを認識している一方で、/l/と/r/の困難さはあまり認識されていなかったようである。以上の結果により、分節(音素)的特徴に焦点を当てた発音指導の必要性が再確認されたことを指摘している。これらの分節(音素)に関する結果は、指導者が既存の課題と新たな問題を踏まえ、学習者の発音に対する意識と能力を向上させ、より明確で効果的なコミュニケーション能力をサポートする教材やフィードバック戦略を設計する上で貴重な知見を提供したと主張している。

語強勢や語レベルのイントネーション(ピッチパターン)といった超分節(音素)的特徴についても調査を行った結果、本研究では、語強勢の方がより明瞭性に大きな影響を与えることが判明したとしている。音響分析により、「influence」と「annual」における語強勢の配置が正確な参加者は、波形やスペクトログラムが英語母語話者に近く、高い明瞭性を示した一方で、語強勢を誤った参加者は、明瞭性が低下し、単語の意味の誤解を招く可能性があることがわかったことが指摘されている。語レベルのイントネーション(ピッチパターン)の分析では、単調なピッ

様式第5号2

チパターンそのものが明瞭性を著しく低下させるわけではないことが判明したとしている。語強勢が正確であれば、ピッチパターンが平坦でも一定の明瞭性が保たれる一方で、高めのピッチパターンがさらに明瞭性を向上させる傾向があったことが示されている。これらの結果は、2人の評価者によっても確認され、語強勢が語レベルのイントネーションよりも明瞭性に関して重要であることが示されている。以上の知見は、日本人学習者の発音指導において、語強勢や語レベルのイントネーションの改善が明瞭性向上と自信の向上に寄与する可能性を示唆している。

本研究の意義には、理論的なものと実践的なものがあることが提示されている。理論的意義としては、日本人英語学習者が直面する発音上の課題に関する知見を深化させた点が挙げられている。既存の理論に基づき、分節(音素)的および超分節(音素)的特徴の双方が発話の明瞭性や全体的なコミュニケーションにおいて重要な役割を果たすことが確認され、特に語強勢の影響が大きいことが示されている。また、参加者の認識と実際の発音の困難さとの不一致も明らかにし、発音に関する明示的な指導とフィードバックの重要性が示されている。実践的意義としては、具体的な発音課題に基づく指導方法の改善が提案されている。例えば、子音の問題が顕著な学習者(グループA)には、/l/、/r/、/θ/、/ð/に重点を置いた練習を推奨することが重要なものに対して、母音が困難な学習者(グループB)には、/æ/、/ɔ:/、/əu/の区別に加え、語強勢や語レベルのイントネーションの訓練も併せて行うことが有効であると述べている。さらに、学習者の目標(英語をリンガフランカとして使うための「伝わりやすい発音」か、外国語としての「母語話者に近い発音」か)に応じた指導が重要であることも示唆されている。また、デジタルネイティブ世代の学習者には、「ELSA Speak」や「発音図鑑」などの音声認識技術を活用し、自律的な学習環境を提供することで、発音練習をより効果的かつ頻繁に行う支援が可能であることも指摘している。

本研究には、いくつかの課題があることが述べられている。それは、サンプルサイズが比較的小さいために一般化の難しさがある点、そして質的研究における発音分析には主観性が伴い、評価者の言語的背景や主観が影響する可能性がある点である。また、コントロールされた資料に基づく録音と自発的な発話データの収集を行ったものの、これらのデータが実際のコミュニケーション場面での自然な発話パターンを反映しているとは限らないことも指摘されている。超分節(音素)的特徴の分析は語レベルの強勢とイントネーションに限定されており、文レベルの強勢やイントネーションといった広範な発音課題を捉えきれていない点も示唆されている。






今後の研究においては、これらの課題を克服し、新たな領域に取り組むことが重要であることが示されている。より多様な参加者を含むサンプルサイズの拡大により、結果の一般性を高めることが可能になることが指摘されている。また、評価の客観性を高めるため、様々な言語背景を持つ評価者を増やすことに加え、音声認識ソフトや音響分析プログラムを活用した評価手法の開発の必要性が指摘されている。さらに、より自然な発話状況でのデータ収集により、実際のコミュニケーションにおける発音能力を把握することが期待され、超分節(音素)的特徴についても、文のリズムやイントネーションなどの詳細な分析を行うことで、より包括的かつ実践的な発音指導に向けた知見が得られるであろうことが述べられている。

本研究は、英語を専攻する日本人大学生が直面する発音課題の理解を深め、効果的な指導方法の開発に寄与している。さらに、参加者の自己認識と実際の発音の困難さとの不一致を明らかにすることで、日本の英語教育における発音指導の質を向上させる可能性を示している。そして、研究で得られた超分節(音素)的データは、今後の研究の基盤として活用し、学習者が現実的かつ達成可能な目標を設定し、学習を進めていく際の指導に貢献することが主張されている。

本研究は、意思疎通にとって最も重要な意味の違いに関する点において、言語の本質である音素に着目し、日本人英語学習者にとっての困難面を、先行研究への学術的検討を踏まえ、英語専攻学生へのアンケート調査に基づくデータを綿密に分析することにより、説得的に解明した研究として高く評価できる。また、日本人英語学習者における学習のあり方についても興味深い知見を提示し、本研究の理論的意義に加えて、実践的意義にも言及しており、英語学習の発展に大いに貢献することができよう。申請者も認めているように、いくつかの課題点は存在するものの、それは本論文の本質的な価値を決して損なうものではなく、その点については、今後の研究に期待したい。

以上のことから、当該博士学位申請論文は、博士(文学)を授与するに値するものである、と結論づけられる。

(令和 7 年 2 月 8 日)

主査	玉井 暲 	副査	富永 英夫 	副査	前原 澄子 
副査	梅原 大輔 	副査	田中 真由美 	副査	ケビン・パートレット 